



中村俊定文庫  
文庫 18  
509  
3



去来抄下

修行教



去来曰蕉門に千葉不易の句一時流り乃句との案に  
 是を二叶のつけと流りとももてえき一なり不易哉  
 志とていふ基立とて流りを志とていふ風新とてい  
 不易ハ古も直とて流り叶ふなるに千歳不易といふ  
 流りハ一時くの變りてき流りの風を古も直とてい  
 今日此風を變りて用ぬるは意一時流りとていふ  
 正流りなり



吟みあゝるもれは三日月をまわす事ふー物敷寄とハ  
いひさー

魯町曰流行の句いふに去来曰流りの句きたのれま一つの  
物敷寄ありてとやる也形容衣裳器物等にいふまで時と  
乃とやまあることとたると

むすやゝも夏よりまの思ふさうも

は神久しく流ります

あはハ松もてこそふへすまれ書 松下

浦光肥す浦光瘦するもなむなむ 常矩

或いはどらめあゝいハ歌書の視るひみき謡の詞とりふと成

物敷寄とあゝるをも一時流行し物敷寄とあゝるも  
人かー魯町曰むすやゝも夏よりまの思ふさうも  
去来曰流りを歌の一事うと物敷寄とあゝるも  
歌とあゝるも

魯町曰不易流行其え一なりとまゝいふ去来曰此事辨  
くくー増人作をたるといふ不易を無爲の対流り  
坐卧行住屈伸伏仰乃取同一くくさるるも一時くの  
変風乞之姿ハ時に替るといふも昔も有爲もりとな  
同ー人也魯町曰風と変るもなまゝ人ありとまゝいふに  
去来曰本をたるといふて末と変る時を或ハ変風と変風

俳諧とておれ或を離れしといふもはなれ

魯町曰基より出るも出るもいふに去来曰基より  
す〜ハ解〜るか〜いさあ〜に急ねる物〜は  
さあけ〜物〜り付た〜と先師の風といふも

貞固く松より門まで女ともまほひ

蹴わり蓮乃葉もあ〜く雨をい〜素堂

らららき詩り語り又文字の教合〜

散花ふた〜ら〜め〜くの春 幽山

け句を謎なり擬諧歌に謎の神もる事やをさ〜  
俳諧歌体よりい〜て〜素〜

魯町曰先師も基よりおさ風傳るまや去来曰奥州行御乃  
あはあ〜せり御の〜に〜  
〜にも あ〜さんや甲の〜り〜  
後よあなれ二字を捨ら〜り是の〜に〜異体乃句  
〜も〜持〜も〜此年の〜め〜不易流りの  
教を説き〜魯町曰不易流行の事を言説りや先師乃  
祭明りや去来曰不易流行ハ事事〜渡り也志〜も  
あ〜の先達気取〜人〜長頭丸ら〜と込〜神  
之〜〜遊り〜 角樽や傾けの〜丑の〜  
むみ水あけて咲せよ天龍寺と〜るま〜た吟〜り

世に人といふを其のとき物とせしむるはめれども風と  
変するもそのとき宗周の一時もそのとき  
破る新風を天下に流りし一物といふは此教の  
まゝりしよりこれより都鄙乃宗匠を言風を用ひ一旦流く  
を起せりといふも又その風を起したる物とて時々変す  
つゝ及ぶとて先師を以て流儀乃本伴と見つけ不易  
乃句とまゝの風を時々変ある事とて流儀の句  
変ある事とて分ち教の流儀も先師を以て宗周の  
人といふは流儀の流儀の流儀といふは宗周の  
中興用山なりといふ

夫れ曰不易の句も當時を伴と好むとて是も又流りの  
句といふは流儀也

去来曰流門も不易流りて流儀といふは或は其の句の  
云流あり是も流儀といふは流儀といふは不易流りの  
教といふは流儀といふは流儀といふは流儀也

去来曰俳諧を流りせんと思はむより時代く乃風  
宗匠のの体と能く考ふ盡し一は是流を時を新言  
たののの分物なり

去来曰俳諧の流り者ハたのの好む風は先達乃句流  
一すといふ尊く學びて一すといふ不審とて一雅と擇ふ



許六曰發句ハ取合て促す時き句多く出暮るも然るに  
初學者常らむをたしめし切者及ては取合不取合の  
論もあはれ

許六曰發句ハ題の曲輪を飛出さず促さず一廓のうちに  
かぶる也自然曲輪乃中よりハ天然より希也

去来曰發句を曲輪の内なるは然るもあはれ即興感偶  
すも物も多しハ内あり然るも常に業るに内をさす  
多くハ古人の糟粕なり千里をかけ出す吟する時き句  
たれまはれし第一等類との信初學者の思ふや  
まは切も然る及まハ又内外の論もあはれ凡そ此

白毎曲輪の内なり平此事を示さハ電も徳利さけて無かり  
と云は徳利さけさるるはさす月には皆さやまを  
利よりしとを引ゆるは皆さるるたす駒逆とさすぬ  
去来曰他門と蕉門とハ一葉一花に遠いありと身も也  
蕉門も景情ともはさるる有まを吟す化流を心中に巧ま向  
と見えたりたると清遠兼夜さすまををませり  
元日新室ハまきまに舟小鴨川や二度の網子點つ  
といふこと禁闕は遠きまに洛陽は舟小  
ひの川ハさき事や皆是細工なり

去来曰蕉門の發句ハ一字不通乃田丈十歳以下の小兒も時ふ



よりてよふ句あり却る化門の功者といふ人きそあふ  
化流きそ流乃功者ありそ流ハそ流ありそ流ありそ  
しと見えそり

去来曰謎語多新意と專よすといふも物終本情を遠く  
いふも終よあふ若其事成らばそりそりそりありたふ  
感時花滅涙惜別鳥驚心或そ桜花ちそちそ人あふそ  
あふそ人の来てもんなくにといふたふひなり感時惜別  
大夫人の思そる是等一首乃眼也

去来曰謎語ハ火とも水ぬいひなすと清浦といふも迷ひて  
雪乃降る日そ汗とくきそりそりそりそりそりそり  
人ありまき火と水とはうりそりそりそりそりそりそり  
はらそり故なり雪の日そ汗とくきそりそりそりそりそり  
はらそりそりそりそりそりそりそりそりそりそりそり  
たはらそりそりそりそりそりそりそりそりそりそり

去来曰句業ハ二所あり趣向より入るも又詞道具より入るも  
かり初及奥より入る人も多き也他多句也趣向より入る人も  
遅吟寡句也そりそりそりそりそりそりそりそりそり  
入るもそりそりそりそりそりそりそりそりそりそり  
そりそりそりそりそりそりそりそりそりそりそり

去来曰蕉門ハ同業同電とそりそりあり是も前吟の禱歌

ふ入る他を就句也たしと竿もきくと物もくしとくし  
句を力の猶う降るふさるる或ハ杖のみくして地もくくぬ  
と吟くくゆる也同電乃句ハもかかかかかかかか兄より  
生きたかかかんハ又も柄なり

去来曰句に句勢との事あり文ハ文勢語子語勢ありとの  
ことなるといふことく小糠雪と云句と先師曰  
亦あつとと小ぬゆゆ降ると他は句勢ありとあり  
去来曰句に姿と云も然ありたると

妻よ小雛子お身をとかさすす 去来

初きば句つとよ小雛子のくろたつてはと他はくしりく

先師曰去来汝いすく句は姿と云すや同く事も形いつて  
姿ありとて姿くはくはなり支考ハ風姿といふもさく  
去来曰句に語路といふも然あり句くく事也語路を  
盤上と玉のけくく滞なきとす又喜柳の風に  
乱るくく優と云もも木もくく人溝川ふ古泥の  
なる向やありありくくたるいけりくく外巻中  
一句二句ハ曲と云もあもくくまもも語路の滞る  
き嫌ふ也

先師曰幾句ハ昔より様々替り侍候附句ハ之変はく  
ま新むくくハ附拍と云もく中はを公階と云もく



看破せしむる一

杜年日句の位とはいふふ事よ去来日新句位を  
も踏る事なりたといふ事句ありとも位意せしむるの  
先師の意の句とあけていふ

上巻新干菜まきむむもくもめさく

馬よおぬ自は内てろひさく

新句も人の妻もあは武家町の下女もあは宿屋  
回座新下女なりと見しを位を言わぬ所也

細き目には花見る人の頬をほく

あは色も新新新編らひ

新句言代り人のありさ偏なり

白粉とぬれも下地くろい顔

涙もあは新新のたまも新

新句のさ偏さやの女と見ゆ

尼もさるつる霄乃まぬく

月影も新とやんふさく

新句いふも新も新の妻と見ゆ

ふす偏つらん洗つあつ

無えあ新新新新新

新句新のさるも新のさるも新のさるも新のさるも

くちくちくち

杜年曰面影もて附ると云はく去来曰くつりひりた句ひも  
附後の時毒也おもつけを附せし終年也むらゝいおほくハ  
く事成るに附りてはく面影もて附るといふも

草菴に志はくく居てハキヤアリ

いのちくちくちを撰集乃何故

初き和哥の奥儀も志くく附り

先師曰前を西り能周との境界と云くくす  
さくちと云にありと附んもはくく心た面影もて  
附くくくかくちくちぬいこく西り能周の面影

あつちくちくち又人と言そりし終りもあつちくち

条心終りてめにし終りすく山

内務の路くちくち人き誰そ

先師曰いふは面影もくおもつけありとあり面影の  
支考も書き終りてはく合はく

支考曰附句ハ一句も一句也前句附るといふ句も  
ハ一連誦みいりては其場人其時節等前後の  
見合ありて一句に多ハあまき物也

去来曰附句ハ一句も千万也故に誦讀変化極れ  
支考く一句も一句といふも附る場の事なるハ一附る場

多くなむ物也句を一場の内をいふ月も有し

先師曰氣色をいふとつてけりも与し天象地取人事

草木昆虫鳥獸のありつれ其取容みなく多き也

支考曰附句ハ附る物なり今能離譜をつくるはさうとす

先師の句一句もつらさういふ

去来曰附句ハ附る物なり附句ハ附るハ病なり

今能他者附る事と初人の業の程をおぼえたりけり

附る句多し一人も又字はさう人乃いふ事と秘を

附る句と答はれ却るべく附る句と笑ふやうなり

余、生るるは各おなる事も多し

去来曰附物もつて又分附るを附るると附るるは師志れ

附物成るるれ情をひくは附んは前句なりけり句は言

なりしてハいつまは附るるの附んは情をひく事也

去来曰蕉門の附句ハ前句の情をひくると嫌ふは前句ハ

是いふに就場いふは人々其事と信するよく見ると前句

とつまはさうして附

先師曰附物もつて附る事當時好はるるも附物もつて附

るるもつて附物もつて附るるもつて附るるもつて附るるも

宇鹿曰先師十七の附る踏通は傳授し給ふは去来曰

孝境の門人の教は依て附方を書出し給ふは去来曰

とせぬ附方の是よかまりとて人の迷ひぬんとて  
於ら向ふ事か一終り分十七ヶ条とて人々えり是を  
借交とてなまじりて大津までついでとて  
踏通す其反言は拾ひてりて人の教るもや許六曰はる  
祢りひるハ千那法師なり

去来曰附句ハ何事なくさりとて  
少むに思業工夫一々附句をなむむき苦一々事也

去来曰風ハ千変万化とていふも句体新く濁く  
慳なる正く厚く困なる和なれ剛なる解なる  
速なる此ハ一鈍く濁ゆる弱く重く薄く急く

濁ゆる弱く騒一々可まかぬのさふい愚一但一  
句もき音通ある一

支考曰附句ハ句少新言なり附る場は新言あり

去来曰古風の句を用ふるにも場よりて  
あまはいう台体乃とらみ今や一

先師曰一卷表より各抄と一初抄の裏より  
去来曰一卷面をなまじりて一羊より各抄の裏よりけ  
表より物敷も曲もな一  
ていさりと骨折ぬや一  
退屈いてきり物也様や句わんとすは却句志ふ

了くおまぬ物なりさしれと末くまじ吟席いふみありき  
好ま句出来んを号理よ止るよそあし好句を思ふを  
といふ事し

其角曰一卷子好句九句十句有るも一二句好句ありは  
能句とせんといふべし此部に不其来たるも然なりいま  
好句ありしむらハ随分好句を思ふ也

去来曰附物を附る事尚時嫌ひはれどもあつりせん合  
一卷子一句二句ありんハ又風流なるべし

渡化曰今秋雑諧物語多を用ゆる事いへ去来曰回くハ  
一卷子一二句ありま原一猿蓑の中は侍人なり小徳門の

健も門士の翁なり此集撰む時おくりおの句をくかしく  
粽造の句を他へ入給つる

去来曰凡吟ある時を風あり風を必要す是自然の  
先師乞紙よく見ぬま一風にまくとまのまのし  
示し給つるを先師の風なりとも一風にあつて変化  
を去るよふを却る先師おろくにたつる

杜年曰発句は苦悪いふに去来曰發句ハ人のまのいふと  
感らるるよりまあまのいふは亦也まのいふは  
りま又を次へまあまのいふは下也

杜年曰發句と附句の境いふに去来曰七情万景くろに





ハ哀なれ句あり細ハたよりむた句ありは志ありハ  
句好安あり細き句好くありは是も證句とあはせ  
いん

十歳子も小粒ありぬ秋乃風

先師曰は句志をりあり

そとともと藤入ておろ余吾の海

先師曰は句細ありと評し終ひと也

去来曰想してさひ信細志をりの事ハ以心傳心るは也  
唯先師の評はあけて教る能は化をわけて明む  
先師近化乃年深川と出流ふとた野坡回曰といふ

やとり今のそと信一信也先師曰志そと今風の  
なる一そと年もあるそと想ハ又一変わらむとを判  
今年素堂子洛の人信一曰蕉翁の遺風天下に  
満て漸く變すそと時とれと昔子そとそとを同  
して我と吟舎して一の新風を真りせんそと去来答云  
先生の言がそとけなく悦び信る予も兼は思ひ分たも  
あそと幸は先生とそとそとたそと二之の新風を起さハ  
おそとそとハ一度天下人をねとそとせんそとそと世波  
老の波目そとそとそと今を風雅を遊ふ無たいとそと  
そとそと唯清秋多ねむし信るそとそと中素堂子そと

先師の言友ありて博覧賢才の人なり久しく世に傳名  
きり近來は存する者も少く又いふ家傳法を  
吐出す人も少くといふ中意なき事あり

於暮雨卷 噯居士一音書

大尾

太來抄跋

崑岡之璞非人採之則誰知璞之爲玉乎一  
日 先生弄二三子游焉得諸幽蘭之下琢  
而磨之皓々乎世所謂玉鏡也使對之者心  
在塵埃之外則去來之功至是可謂發輝千  
歲矣吾徒愉快其在於斯

井士朗



跋

安永四年乙未三月

新榎木町二条上九

井筒屋庄兵衛

堀川錦小路上九

白王都書林

西村市郎右衛門

寺町松原上九

辻井吉右衛門

知新齋藏版書目

京都寺町松原上九處

辻井吉右衛門

西溟餘稿

大潮著  
文之部

三冊

西谷名目首書

四冊

部類現葉和歌集

十六冊

同詩之部

同右

二冊

辨天利益和談鈔

五冊

桐火桶

定家卿

二冊

松浦詩集

同右

三冊

日蓮大御傳記

十冊

拾遺謠百番

廿冊

四書白文

三冊

唯識義章

十冊

上懸小枕謠百番

四冊

同字引

小本

一冊

同義林章

二冊

下懸小枕謠百番

四冊

山海經

七冊

魚山萬芥集

一冊

同外百番

四冊

李嶠雜詠集

二冊

同南山進流

一冊

拾玉用文宝箱

一冊

唐僧詩選

二冊

聲明系譜

一冊

女初學用文章

二冊

千家詩首書

二冊

梵書朴筆手鑑

二冊

長者教

一冊

三體詩歌留多	箱入	聖一國師法語	一冊	南海治亂記	十八冊
廣益和玉篇	一冊	施餓鬼分解	一冊	商賈往來	一冊
書翰諺解	一冊	六祖法室壇經	一冊	今川腰越	一冊
局方發揮	一冊	觀經厭欣鈔	三冊	實語教	一冊
察病指南	三冊	往生要集和解	八冊	子昂赤壁賦	一冊
修養編	四冊	順禮手引案内	一冊	京都繪圖	一冊
俳諧去來抄	<small>尾張曉菴先生訂正 東奥門人吾溟校</small>	三冊	唐詩印譜	<small>雲花園 篆刻</small>	一冊
同萱公遺書白砂文集	<small>右門門人 臥中央校</small>	一冊	俳諧横の並	<small>士朗撰</small>	一冊
同許六問	<small>右門門人 白圖五校</small>	三冊			
同如きふくろ	<small>右門門人 士朗著 都負</small>	一冊			

寬政四年 子 四月

越後列后船錦水閣瓢哉

